大正・昭和前期の舞踊教育
――「遊戯」から「ダンス」へ――

○松　本　千代栄
安　村　清　美

目　　次

はじめに
Ⅰ　「書名」に表われた動向
　1）遊戯観を主軸とする「遊戯」名
　2）純粋芸術を目指した「表情遊戯」名
　3）身体教育とダンスの本質とを照合した「体育ダンス」名
　4）要目名称を遵守した「行進遊戯」「唱歌遊戯」名
　5）芸術教育を標榜した「教育舞踊」名

Ⅱ　著者と舞踊観
　1）『体育ダンス』の著者
　2）『教育舞踊』の著者
　3）実践内容の検討
　　－外来文化摂取と自立－
おわりに

はじめに

大正・昭和前期と劃したこの期――第一次世界大戦から第二次大戦勃発までの約30年は，内には学校教育制度が定まり，初の「学校体操教授要目」制定（大２）から，更に二度の改正（大15，昭11）を重ねて充実し，外には明治期国家主義，家族主義を根底としながら，教育哲学の導入（J. Dewey, P. Natorpら），新学校の設立と自由主義教育の促進，八大教育主張など新教育思想がおこる。即ち，一個の人間として生きようとする近代的自我を象徴するかのように自由教育が開花する前半から，次第に軍国主義に傾き，文化統制の強まる風潮の中で，最終的には「体操科」は「体錬科」として「献身奉公の実践力」に資する体育となる波瀾の時代を意味している。

欧化と国粋，個人と国家，男性と女性，また，自由創造と統制――と時代思想の波が渦巻く時代は，体育教育にとっても，体育学の樹立をめざし，形式体操に「遊戯思想」が導入され，「身体教育」を拡充する際立った時代である。多くの著者が，身体科学，東西の遊戯観，遊戯史を求めて体育を考えたこの期は，舞踊教育にとっては，「遊戯」領域を母胎に舞踊芸術への志向が胎動する「遊戯からダンスへ」の時であり，欧化を過ぎて自立へ向う時と推測される。

この期を，旺盛な外来文化摂取から自作の創出へ，体育教育から芸術教育へと眼を馳せた舞踊教育史上の活力ある時代と仮定し，本論は，この自由の翼を拡げて，人間と舞踊を追究した時代の特性を明らかにし，そこに内包される意味と問題を読みとりたいと考えるものである。

あわせて，舞踊教育，即ち舞踊による教育から舞踊そのものの教育へと開扉し，両義性をもって「舞踊教育」が考えられようとする現代[(1)]に，この期がもたらす示唆的な意味を読みたいと考えるものである。

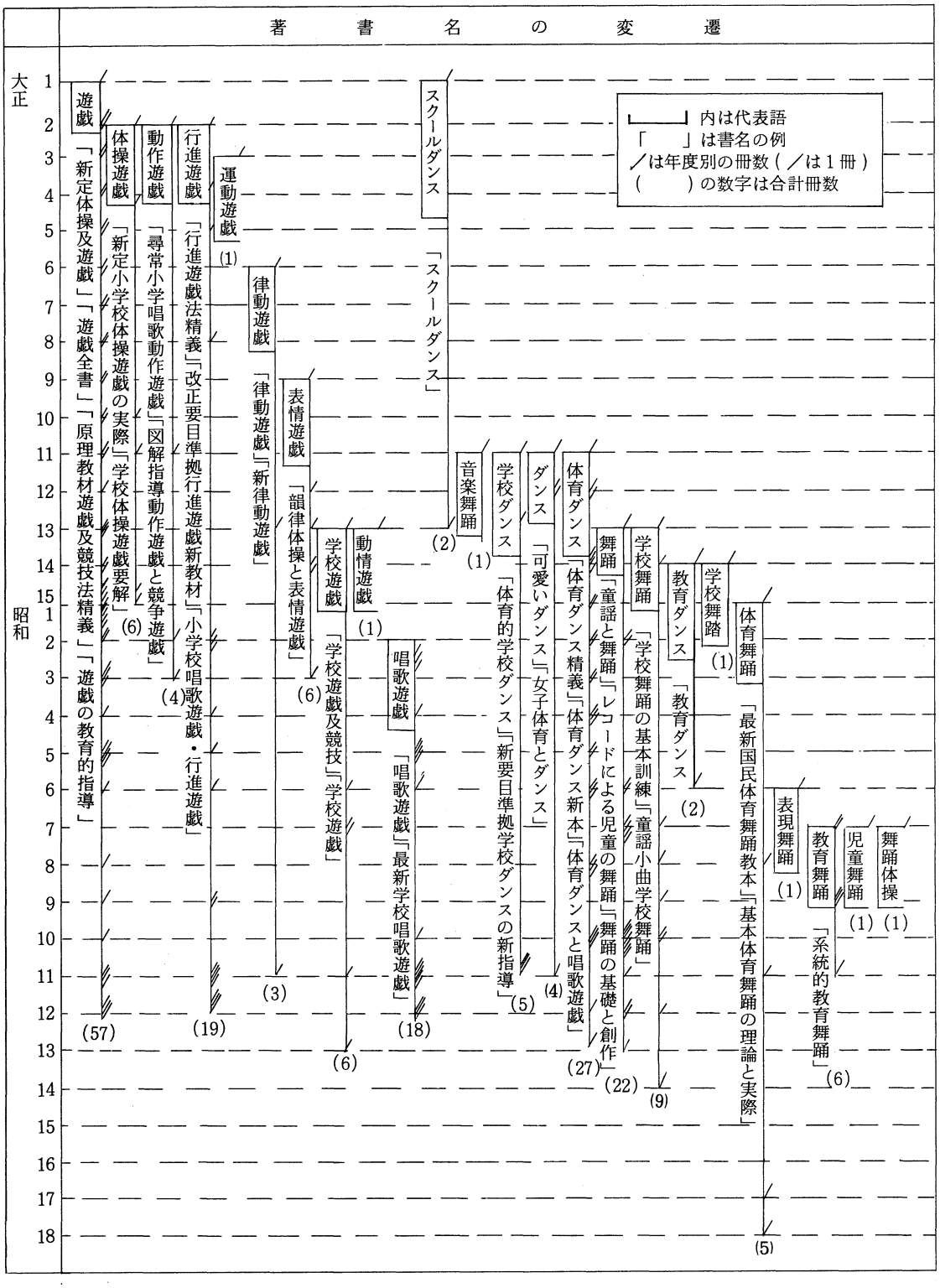
Ⅰ　「書名」に表われた動向

この期に出版された舞踊教育関係書167著（表1，一覧参照）の分類を行った結果からは，書名は三つに大別される。即ち，「遊戯」「ダンス」「舞踊」の名称である。

「遊戯」名称には，すべての遊戯の総称（大正２年教授要目では「体操科ノ教材ヲ体操教練及遊戯トス」となり，競技と分離していない。）として冠される他に，「動作遊戯」「表情遊戯」や「唱歌遊戯」「行進遊戯」等，内容を限定して用いられ，「ダ

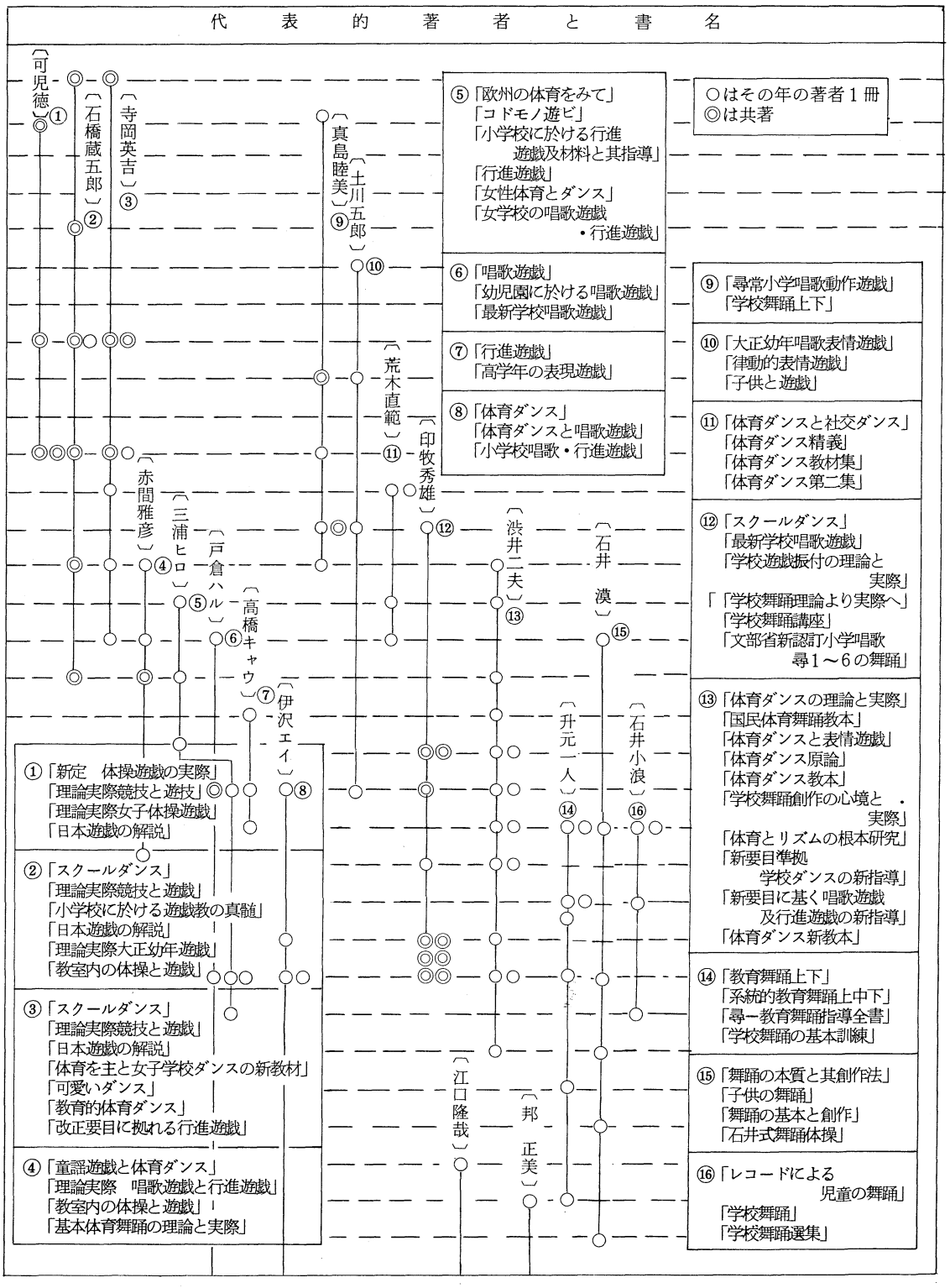
(1) 松本・岩川「現代舞踊作家小論」　お茶の水女子大学人文科学紀要　33巻　昭55および
松本・山田「戦後転換期の舞踊教育」　お茶の水女子大学人文科学紀要　34巻　昭56

表 1　著書


著書名の変遷
大正
昭和
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
遊戯
「新定体操及遊戯」「遊戯全書」「原理教材遊戯及競技法精義」「遊戯の教育的指導」
(57)
体操遊戯
「新定小学校体操遊戯の実際」「学校体操遊戯要解」
(6)
動作遊戯
「尋常小学唱歌動作遊戯」「図解指導動作遊戯と競争遊戯」
(4)
行進遊戯
「行進遊戯法精義」「改正要目準拠行進遊戯新教材」「小学校唱歌遊戯・行進遊戯」
(19)
運動遊戯
(1)
律動遊戯
「律動遊戯」「新律動遊戯」
(3)
表情遊戯
「韻律体操と表情遊戯」
(6)
学校遊戯
「学校遊戯及競技」「学校遊戯」
(6)
動情遊戯
(1)
唱歌遊戯
「唱歌遊戯」「最新学校唱歌遊戯」
(18)
スクールダンス
「スクールダンス」
音楽舞踊
(2)
学校ダンス
「体育的学校ダンス」「新要目準拠学校ダンスの新指導」
(1)
ダンス
「可愛いダンス」「女子体育とダンス」
(5)
体育ダンス
「体育ダンス精義」「体育ダンス新本」「体育ダンスと唱歌遊戯」
(4)
舞踊
「童謡と舞踊」「レコードによる児童の舞踊」「舞踊の基礎と創作」
(27)
学校舞踊
「学校舞踊の基本訓練」「童謡小曲学校舞踊」
(22)
教育ダンス
「教育ダンス」
(9)
学校舞踏
(1)
体育舞踊
「最新国民体育舞踊教本」「基本体育舞踊の理論と実際」
(5)
表現舞踊
(1)
教育舞踊
「系統的教育舞踊」
(6)
児童舞踊
(1)
舞踊体操
(1)
└──┘内は代表語
「　」は書名の例
／は年度別の冊数（／は1冊）
（　）の数字は合計冊数

名の分類

（松本，安村，中野）


代表的著者と書名
〔可児徳〕①
〔石橋蔵五郎〕②
〔寺岡英吉〕③
〔真島睦美〕⑨
〔土川五郎〕⑩
〔荒木直範〕⑪
〔印牧秀雄〕⑫
〔赤間雅彦〕④
〔三浦ヒロ〕⑤
〔戸倉ハル〕⑥
〔高橋キャウ〕⑦
〔伊沢エイ〕⑧
〔渋井二夫〕⑬
〔石井漠〕⑮
〔升元一人〕⑭
〔石井小浪〕⑯
〔江口隆哉〕
〔邦正美〕
⑤「欧州の体育をみて」
「コドモノ遊ビ」
「小学校に於ける行進遊戯及材料と其指導」
「行進遊戯」
「女性体育とダンス」
「女学校の唱歌遊戯・行進遊戯」
⑥「唱歌遊戯」
「幼児園に於ける唱歌遊戯」
「最新学校唱歌遊戯」
⑦「行進遊戯」
「高学年の表現遊戯」
⑧「体育ダンス」
「体育ダンスと唱歌遊戯」
「小学校唱歌・行進遊戯」
○はその年の著者１冊
◎は共著
⑨「尋常小学唱歌動作遊戯」
「学校舞踊上下」
⑩「大正幼年唱歌表情遊戯」
「律動的表情遊戯」
「子供と遊戯」
⑪「体育ダンスと社交ダンス」
「体育ダンス精義」
「体育ダンス教材集」
「体育ダンス第二集」
⑫「スクールダンス」
「最新学校唱歌遊戯」
「学校遊戯振付の理論と実際」
「学校舞踊理論より実際へ」
「学校舞踊講座」
「文部省新認訂小学唱歌尋１～６の舞踊」
⑬「体育ダンスの理論と実際」
「国民体育舞踊教本」
「体育ダンスと表情遊戯」
「体育ダンス原論」
「体育ダンス教本」
「学校舞踊創作の心境と実際」
「体育とリズムの根本研究」
「新要目準拠学校ダンスの新指導」
「新要目に基く唱歌遊戯及行進遊戯の新指導」
「体育ダンス新教本」
⑭「教育舞踊上下」
「系統的教育舞踊上中下」
「尋一教育舞踊指導全書」
「学校舞踊の基本訓練」
⑮「舞踊の本質と其創作法」
「子供の舞踊」
「舞踊の基本と創作」
「石井式舞踊体操」
⑯「レコードによる児童の舞踊」
「学校舞踊」
「学校舞踊選集」
①「新定　体操遊戯の実際」
「理論実際競技と遊技」
「理論実際女子体操遊戯」
「日本遊戯の解説」
②「スクールダンス」
「理論実際競技と遊戯」
「小学校に於ける遊戯教の真髄」
「日本遊戯の解説」
「理論実際大正幼年遊戯」
「教室内の体操と遊戯」
③「スクールダンス」
「理論実際競技と遊戯」
「日本遊戯の解説」
「体育を主と女子学校ダンスの新教材」
「可愛いダンス」
「教育的体育ダンス」
「改正要目に拠れる行進遊戯」
④「童謡遊戯と体育ダンス」
「理論実際　唱歌遊戯と行進遊戯」
「教室内の体操と遊戯」
「基本体育舞踊の理論と実際」

ンス」名称には「ダンス」「スクールダンス」「学校ダンス」「体育ダンス」及び「教育ダンス」等の他に，「教育的体育ダンス」「体育的学校ダンス」など場と教育目的の表徴を強める書名が多くなっている。「舞踊」名称には「舞踊」「学校舞踊」「教育舞踊」などが含まれ，「ダンス」の国語化が書名上に増加する。

これらを年代的にみると，「遊戯」名称はこの期を通じて用いられ，「行進遊戯」名称もこれにつづく。「唱歌動作遊戯」「表情遊戯」は，大正期前半にあらわれ，「唱歌遊戯」名は昭和初期（大正15年要目改正後）から急増する。「体育ダンス」「学校ダンス」は大正10年以降に，「舞踊」「学校舞踊」は大正末期からあらわれる。「教育」を冠した「教育ダンス」は大正期末に，「教育舞踊」名は昭和7年以降で，少数ながらこの期末を飾るものとなる。全般的に，昭和13年頃から出版は激減する。

「書名」分類上には，遊戯領域から脱して，ダンスの専門領域を主張し，また，体育あるいは教育として学校教育におけるダンスを考えた時代と著者の趣意の表徴をみることができよう。更に教授要目の「行進遊戯」「唱歌遊戯」名称を正座にすえながら，これにあきたりず，種々な名称によって本質を求めたとみる時，書名は時代の側面的表徴として，より意味深く解される。

次下にこれらを大別して考察を進めよう。

1）遊戯観を主軸とする「遊戯」名

明治期における遊戯の価値認識をうけつぎ，外来運動文化導入・教授要目の制定と「遊戯」の位置づけが進む中で，「遊戯」名称を冠した著書は続刊される。

一著[(2)]を例にその論究をみよう。先づ身体の生理的理論を基底に，東西の遊戯観，遊戯史が追究される。即ち，「科学的攻究は刻下の急務」とJ.ロックの哲学，J.スペンサーの教育論に遊戯の意義をもとめ，他方，J.グーツムーツ，F.ヤーン，A.スピースら学校体操を築いた学派の中に，運動遊戯の論拠と実践を探る。理論上に明治期の前進である。即ち，遊戯の本能説，生活準備説，勢力過剰説等，学説を概観し，遊戯の無関心性に着目し，「シルレルの『人は遊ぶ時のみ真の人なり』との言は一大真理」と遊戯価値を追いつつ「人類自然の欲求に応じて発生し来れる溌剌の良材を加味して，戦後の革新に突入せん」とする。大正2年教授要目では「遊戯」領域（競争を含む）に含まれる「行進遊戯」は，ここでは「歩行及び歩行の変形，跳躍及び跳躍の変形を生理的の原理に基きて適切に組成した……教育的運動法」と解説され，「動作遊戯」即ち「唱歌の意味を動作上に表現する一種の教育的運動法」と共に，「健全なる身体と各部の調和的発達を期し，兼ねて身体の端正と挙止の閑雅とに慣れしめ……紀律を尚び，協同一致，事に当るの精神を養ひ，兼ねて調和及び優雅の審美的情緒を養うにあり」[(3)]とその教育目的を定める。

「遊戯」名を冠したこの期の多くの総合書は，明治期を受けて，「書名」上に，遊戯性の強調，即ち，身体発達と人格教化の価値観を跡づけているとみなされよう。

2）純粋芸術を目指した「表情遊戯」名

詩と音楽と動作との調和に児童芸術を結実させようとした人々は，感情の自由な発露を歌曲に求め，「表情遊戯」「唱歌動作遊戯」「童謡遊戯」の名称にその主張を表明する。

大正デモクラシーの中での児童中心主義，童謡，自由画と相ついだ芸術自由教育運動[(4)]に呼応した人々[(5)]は，児童の主体性，個性を重んじ，「児童の思想感情の表れが基本となってそれを美化せねばならぬ」とし，「身体の節律的運動に依って其の感情を表現しようと試みるこの情緒の発表としての舞踊」[(6)]に着目する。例えば，土川は，葛原幽（砂のトンネル，あられ，蓄音機）野口雨情（青い目の人形，紅い花白い花）鹿島鳴秋（浜千鳥）北原白秋（とほせんぼ）らの作詩，弘田龍太郎，中山晋平，梁田貞らの作曲の歌曲によって"律動

(2) 可児・石橋・寺岡「理論実際　競技と遊戯」（大8）
(3) 前掲(2) P.197
(4) 鈴木三重吉，野口雨情，西條八十，北原白秋らの童話・童謡創作に主張されたヒューマニズム ― 謂る芸術教育運動と称されている。
(5) 印牧季雄，土川五郎，真島睦美ら児童舞踊の源流となった人々。
(6) 土川五郎「律動的表情遊戯」第壹輯　律動遊戯研究所（大13）。土川らの「民間」活動の展開は「児童舞踊五十年史」昭33にくわしい。

的表情遊戯”を創出する。

「箱の中から声がでる，喇叭の奥から声が出る……」(蓄音機)には文明の驚きが溢れ，「青い月夜の浜辺には，親をさがして泣く鳥の……」(浜千鳥)には，ロマンティシズムが溢れる。「歌詞の大意とこれを貫いて居る感じを捕えて，末端の區々なる所に拘泥せぬ」「上品」な作舞をめざし「表現は大きく，ゆったりとして，こせつかず」詩情と動作を融合させようとする作者の作風にもロマンの時流が反映する。

児童の表現の自発性を重視し，「感じの体現された運動が表現であり」「純真な芸術によって愈々純ならしむる事ができる」と，唱歌と遊戯を総合した純なる芸術を主張する。芸術と教育の柔軟な関係を唱える当代の思潮を汲んだ実践的展開として，「児童舞踊」の源流である。

これらの童謡唱歌の上に提出された審美的表情的表出は，日本的情趣の作舞を導いた点で大正期の特色を形成したのみならず，その流れは学校教材の一様式を形づくる因をなした点で再認されるべきであろう。

3) 身体教育とダンスの本質とを照合した「体育ダンス」名

遊戯領域を脱し，「ダンス」の原語名をもって専門分化を明らかにした書名「スクールダンス」[7]「学校ダンス」「体育ダンス」はこの期当初に表われ大正末期には顕著になる。

「体育ダンス」[8](体育舞踊)[9]の名称は，一方に女子教育推進の風潮の中で女子の運動法としての価値を強調し，他方に「ダンス」の本質を求める時代を象徴しているとみられよう。「体育」「学校」と冠し，「ダンス」と示した著書の多くは，前述のように舞踊の体育的・教育的価値を重視し，体育教育と舞踊文化の深層の接点を「身体教育」に求めてその融合をねがっている。視野を美的価値に拡大しつつ，当代の体育理念を重視した時代性をここにも見出すことができよう[10]。

例えば，「ダンスは所謂芸術的色彩を帯びた体育である。これによって人の人たる本性を発揮せしめ，その善と美とを完成せしめん」とした寺崎[11]は，「リング氏によりて愈々審美的体操なるもの採用され，ドムニー氏の曲線的運動なるものの発表ありてより，終にデルサート氏によりて四肢や頭や躯幹の表情が研究され，此に於てダンスなるものの形は一先づ完成される」とみる。「心身を練磨すると共に」「芸術味を味ははしむる」「教育的体育的ダンス」を求め，「学校体育とダンス」の関係が盛んに論じられる。「人体の解剖生理及び心理学の原則に基き教育的立場に立ちて組織された」体育ダンスは，「Folk dance, Gymnastic dance, Athletic dance」の三種によって「身心の発達と共に道徳的品性を陶冶し芸術的生活を味ははしめる」べく適合をはかられる。

これらの生理・心理・教育学をふまえた「体育」を重視したダンスは，必然的に身体練習を重んじ，姿勢poseと歩法step中心の前時代を越えて，基礎練習を拡充し，より動的なダンスを招来することになる。これらをより推進した渋井については後に述べたい。

4) 要目名称を遵守した「行進遊戯」「唱歌遊戯」名

「行進遊戯」名称をとる著は，前述のように，この期を通じて出版される。明治期以降の文化摂取から，外来運動文化を総集して，謂る”行進遊戯形式”を抽出し，これに基づいた自作を目指すなど，内容的には変貌しながらも名称は遵守される。

大正15年教授要目改正では，「遊戯及競技」領域に行進遊戯，唱歌遊戯が包括されているが，昭和11年改正では，「基本練習　唱歌遊戯　行進遊戯」として領域が拡大する。

しかし「唱歌遊戯及行進遊戯ニ在リテハ徒ニ技巧ノ末ニ走リ身体ノ修練ヲ忘ルルガ如キコトアルベカラズ」とする要目精神は，ダンスの本質を求めつつも，「行進遊戯は調律的にして円滑，軽快な

---

(7) 寺岡英吉，石橋蔵五郎「スクールダンス」大1，印牧季雄「スクールダンス」大13など。
(8) 荒木直範「体育ダンス精義」大12，砂本靖二「体育ダンス」大13，渋井二夫「体育ダンス原論」昭5など。
(9) 伊沢エイ「体育舞踊」，師範大学講座　体育第9巻　建文館(昭11)　「体育の目的を以て舞踊を体育的に創案したものを云う」「体育舞踊本来の目的は体育に有る」とする。
(10) 前掲(9)で，伊沢は「行進遊戯」の字義が当代の内容にそぐわなくなったことを指摘している。
(11) 寺崎謙太郎，「教育的体育ダンスと其指導法」章華社(大14)
W. Sライアン(米) 大10，Gym. dance 講習会開催，以後師事す(著者付記)

る全身的動作により，快活，温雅なる精神と端正，優美なる容姿とを養い，以て心身の円満なる調和発達をはかるものである」[12]と，「心身ノ発達ニ鑑ミ」「生徒児童身体ノ健全ナル発達ヲ期」す教育目標の投影を濃くしている。

この時，一方に「行進遊戯」の呼称の下に，"ダンス"を考え「すべての芸術作品の内容となるこの美的感情とは，創作者が或対象の享受によって得た霊感をあらゆる労作を経て，発展し，整理し，純化した結果生み出した，いはば感情生活の理想境である」作品を，「具さに享受し，鑑賞するところによって，創作者が経験して来たところの，いわゆる感情純化の過程を追体験することになる」と考え，「身体運動の追体験によって，行為による感情の純化，高揚をめざす」[13]ものと，感情移入の美学に基づく感情教育を主張する論も出現する。

教授要目が著作の推進（内容的には抑制の一面も含みながら）に及ぼした影響は，この期を通じて，量的質的に顕らかに認められる。要目改正前後には出版量が増し，要目の遵守がすべての著の前提として掲げられている。

大正末期からの著書には女性筆者の登場が目立つ。要目の推進の任を負って，女性研究者の登場するこの時期の特色を認めつつ，反面に，女性の分担する領域として，ダンスが女性に傾斜する素因をこの期に認めなければならないだろう。

更に，この期全般を通じて要目重視と共に，用いられた名称の解釈，検討が目立つ。しかし，名称に対する定義は一定せず，広義狭義，あるいは質的な差[14]をもって用いられている。定義の動揺の中に，胎動期の特質を見出すとみるべきかもしれない。（発表資料ｂ－２，ダンスの分類参照）

5）芸術教育を標榜した「教育舞踊」名

この期が，身体運動の本質を論的に求めた点で，明治期の実践的導入を越えることは既に指摘してきたとおりである。

舞踊の本質を論的に求めた人々は，必然的に近代舞踊の趨勢と思想に邂逅する。「ダンスは一種の高尚なる芸術であってそは教育の好機会に充ち，他の芸術やライフに霊感を与える」[15]と先づ芸術性を見裾えた『教育ダンス』。また，『教育舞踊』[16]と名付けた升元は，R.ボーデ，J.ダルクローズに全体性と有機的統一の原理をもとめ，I.ダンカン，R.ラバン，M.ウィグマンに及んで，美的律動運動の思想的系譜を辿り芸術と人格教化に着目する。

舞踊を芸術的舞踊とし，美学・教育学に接近し芸術教育に全人教育をみようとした歩みは，この期末を飾るものとして注目されよう。

以上の概観によって把握されるように，この期の著書には，上述の「書名」上の表徴の差異性と共に，これを越えて，等しく遊戯論に基づき，体育思想の流れをたずね，ダンスの進化の過程と源を問う論的追求と体系化の努力が共有されている。また，いずれの筆者も外来舞踊形式を踏まえ，あるいは詩と音楽に着目し，歌曲による教材の出現を図って多様化している。作品の追体験として，"与える教育"，"ダンスによる教育"（手段的位置づけ）の限界内ではあったが，生理解剖学に立つ身体教育に，奔流の如く美的価値を導入した点で際立つ時代と再認すべきであろう。

身体教育と舞踊文化への開眼 ── その本質的追究と実践が漸く端緒を見出そうとする時，「遊戯からダンスへ」の歩みは，その後の戦時体制の中で急激に錬成主義へ傾斜し，止むなく整一化されていくのである。

Ⅱ　著者と舞踊観

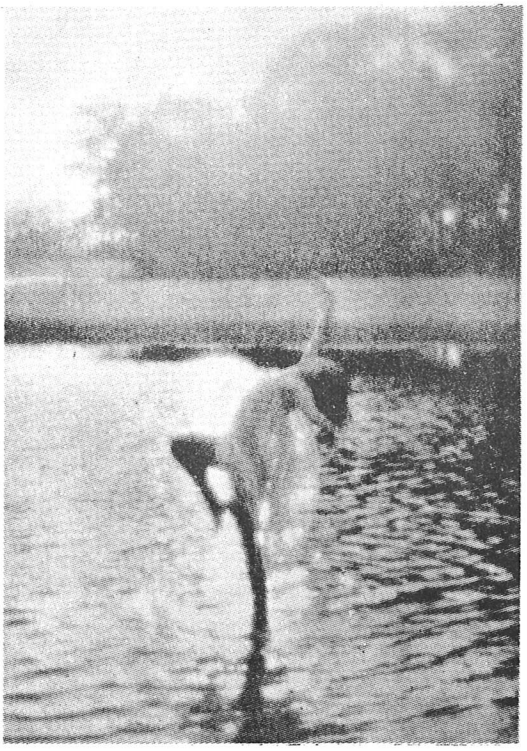
上述の「遊戯からダンスへ」の潮流をふまえ，ここでは，二者を選択し，その論拠を手がかりに時代思潮に接近し，舞踊教育に潜在する基本的課題を探索したい。

1）『体育ダンス』の著者[17]

(12)　高橋キョウ「行進遊戯」右文館（昭４）
(13)　三浦ヒロ「女子体育より見たる行進遊戯」師範大学講座　第13巻　建文館（昭11）
(14)　「体育ダンス」（Gym. dance）をFolk，Aestheticと並列分類する高橋。「体育ダンス」をすべての類別を総括する総称とする渋井など。
(15)　内田トハ，御笹政重「教育ダンス」東洋国書（昭14）
(16)　升元一人「教育舞踊」日本教育学会（昭７）
(17)　渋井二夫「体育ダンス原論」人文書房（昭５）

「組織ある教育的体育的音楽舞踊が吾人の述べんとする体育ダンスなのである」と「体育ダンス」を標傍した渋井は，J.ルソー，H.ペスタロッチの教育思想をふまえ，身体と精神の調和を求めて，J.グーツムーツ，A.スピース，特に，運動に美的形式を導入したM.B.ギルバートやD.M.サージェント[18]ら，欧米の新体育思潮に啓発されて，「体育ダンスの本質的価値」を樹立しようとする。先づ，「身体教育としての特殊的価値」に着目し，従来の身体活動軽視の教育思想に，「身体教育という新目標」を打ちたて，体系的有意識的有目的的に活動を為し，心身の発達をはからねばならないと考える。ダンスは，「身体のすべての部分を最も調和的に合理的に身体教育」するものであり，「自然的な筋肉運動の連鎖」であり，「自発的生活動作の表現であり」「自然的リズムから合成されている」弾力ある「ヘルメス型の教材」として，運動の自然性，調律性，音楽性を強調する。また，体育ダンスの女性教育に対する価値や治療的価値にも言及し，「感受性を豊富にし，心身を統制する基礎的教養」として，先づその価値を説く。

体育ダンスは「音楽の刺激によって生ずる，複雑なる心的現象を，高雅にして，運動価値多き，韻律的動作によって表現」し，調和的発達と感受性並びに表現の能と趣味を養うとする定義は，広く舞踊の進化過程をさぐる知見「舞踏汎論」によって「舞踏は人生である」と見裾えられ，最終的にはステージ上の舞踊を，総合芸術上の極致として位置づける。（「調和の姿型」としてA.パヴロワ，M.ヴィグマン，T.カルサヴィナ，S.マヘサらのアート写真が巻頭に掲げられるようになる。昭8）ここでは，渋井は，「リズミカルな肉体運動による感情表現の芸術である」と美学上に舞踊の特性を認め，「文化価値と教科との関係」（表2）を考えることになる。ダンスは「①形式内容の統一として現われる，②人生に意義ある内容をもっている，



ナチュラルダンス

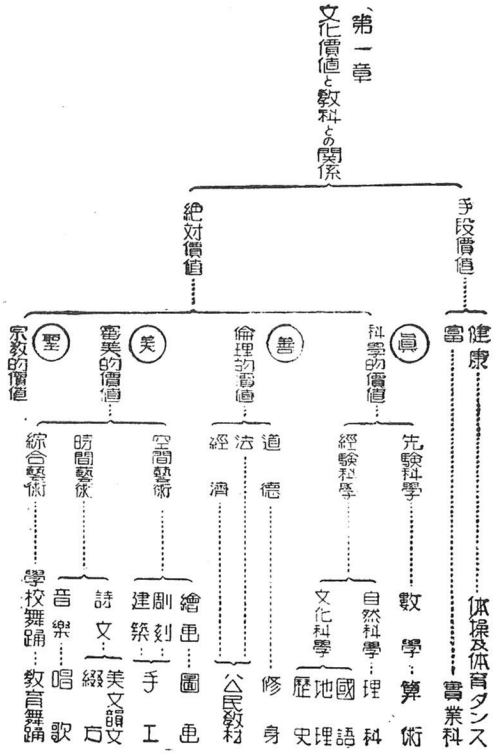


表2

[18] M.B.GilbertのAesthetic Calisthenicsとしての美的形式の導入，D.A.Sargentの大学への導入などはR.KrausとS.A.Chapman, History of the Dance in Art and Education 1981にくわしい（後出　表4）

③仮象の世界に属する（主観的要素），④有機的統一を表わすもの」として美の規範に照し「舞踊価値の解剖」[19]を試み，その結果は"舞踊現象の実体"に図式化される。（表3）

表3（昭8）には，身体の構造機能と音楽刺激の受容一反応過程を両極におき，直観・認識から実現に至る知情意の働きを，運動の働きとその相互作用に示し，最終的には，科学的陶冶(真)，倫理的陶冶(善)，審美的陶冶(美)の「身体教育」として，その構造化をはかっている。

これらの構造論は表2にみるように，「手段価値」に「健康 — 体操・体育ダンス」をおき，「絶対価値」に「審美的価値 — 総合芸術(教育舞踊，学校舞踊)」をおき，舞踊の両義性を理念上に認めながら，実践上には「体育ダンス」にそれらを集約しようとする。渋井の舞踊観の帰結をここにみる。

しかし『体育ダンス新教本』には，「体育ダンス創作法」を付記し，「創作原理」「創作の規範」など原理を示すと共に「構成法の七原型」[20]「創作表現法第一様式～第四様式」と具体に及び，"愉快""哀愁""崇高""優美""光明""忍従""滑稽"など50の感情語と対応する表現様式を掲げて「自己の完成が全一の形に於いて自然に表現せられ流露し，其の美的情操の生活が創作となり創造となり，やむにやまれぬ生活表徴として引き出され生れ出る」，「創作力は何人にも必ずある」と舞踊観を進展させる。実践上には"教材"の提示に止ったとしても，その本質への着目は認められるべきであろう。

これらを，「皇道体現の道」（昭13）と図式化し，「日本精神顕揚の体育ダンス」として，「己れを空うして国家と一体となる国家的情操涵養」を目指した急激な舞踊観の変貌と対置するとき，この期の終末の苦渋の象徴として，個の変貌は，時流を語ってあまりあるものとみられよう。（発表資料(3)参照）渋井のみでなく，体育の国家目的への傾斜の中で，舞踊教育もひとしく共通運命を辿るのである。

目を転じると，大正9年体育ダンス研究会を起し，内外に同人を得，各地に講習会を開いて研究普及に努めた著者の，パイオニアとしての舞踊研究の意欲は，掲げられた内外文献（100書を越える）からも察知される。G.コルビー[21]らの原著に論と実践を求めたこの期のプロフィールを如実に提示しているとみられよう。

その実践内容については後にゆずりたい。

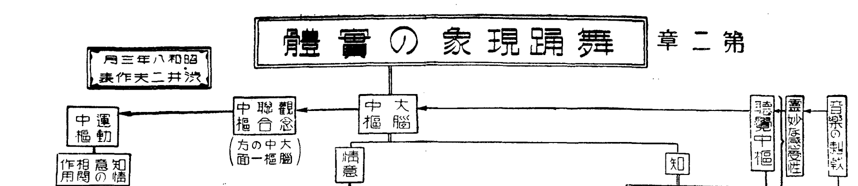


表3

2）『教育舞踊』の著者

「舞踊がやむにやまれぬ内部的泉流の肉体的に旺溢した姿であるならば，その理想は哲学に立脚し，魂の充実した躍如たる芸術としての美学的目的規範に合流せねばならない」[22]と主張する升元は「体育的根柢の下に舞踏を題材とし，是によって芸術的教育に資せんとする」。「近代舞踊の趨勢と思想的根拠」を求めて「美的律動運動派の人々」の系譜と主張を辿る。表4[23]に示すように「極めて自由な，自然な，芸術的表現は，舞踊の最も高い地位を獲得するものであるというデルサート」をはじめ，その弟子J.ステビンスの自然性に立つ身体訓練，I.ダンカン，E.ダンカンらの「自然と調和して自然の動きを呼吸し，鼓動し，感得することを教え，美しい人間としての魂を甦らせる」とする理念，R.ラバンの運動形成，更にJ.ダルクローズのEurhythmics，その門弟R.ボーデの「総べての運動に於いて，一つの有機的に統体性を有すること」の「全体的有機的自然運動」の原理と系譜に着目，「健康と美と力と自由を齎らすべき高次の文化的要因としての教育舞踊」をめざす。

更にM.ウィグマンを「舞踊の純粋性を高潮した人」として，「現代芸術舞踊の最も偉大なる出現」を認めつつ，始祖の業績に舞踊の原動力を感知し，芸術の源流をふまえて「舞踊の教育的意義及び本質」を見出そうとする。[24]

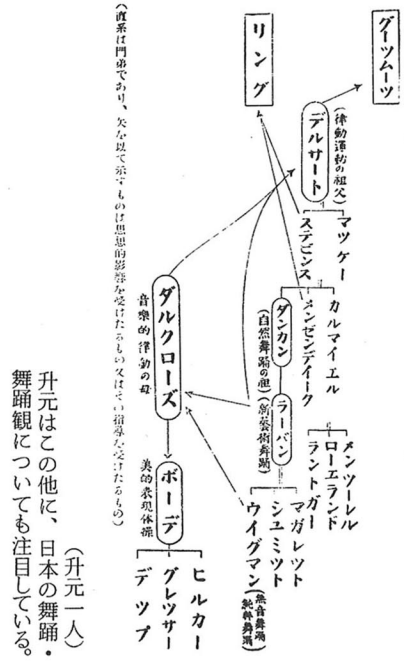


表4

升元はこの他に、日本の舞踊・舞踊観についても注目している。（升元一人）

---

(19) 渋井「体育ダンス新教本　附　創作法」小学館（昭８）

(20) 七原型は，ナチュラルダンス，エッセティックダンスなど外来形式の類型を掲げており，その意味では，“創作”は，理念と実践上の距離を有していたとみるべきかもしれない。

(21) 前掲(17)
Gymnastic and folk dancing books. by Himman,
Aesthetic Dancing. by E. Rath.
Clog and Character dances. by G. K. Colby.
Natural Rhythms and Dances by G. K. Colby.
Athletic Dance and Simple Clogs. by M. Hillas and M. Minghtonなど渋井の掲げた文献上にG. コルビーらの外来様式の導入は明らかである。

(22) 升元一人「教育舞踊」上　日本教育学会　昭７

(23) 升元「系統的教育舞踊指導書」上巻　北海出版社（昭９）P. 3
Francois Delsart（1811～1871）は，グーツムーツに刺激を得「美学の法則を樹立し，音楽と表現芸術と演劇の綜合的研究」を進めた。

(24) 前掲(23)P.36には渋井の教育舞踊に対する見解に反論を記し，あらためて原理化を試みている。

その論体系の集大成は，「全一なる生命活動の存するところ必ず心と肉体とは一体として，一元的に存立するもの」として，先づ「人格教化としての美的運動」を原理化する。ボーデの全体性，ダルクローズの有機的統一体からは，Ⅰ.「統一性の原理」を，近代思潮の自然への渇仰，運動それ自体の持つ喜びと自然運動からは，Ⅱ.「自然性の原理」を見出す。更に，リズムの生理心理的，論理精神的見解からは，Ⅲ.「律動性の原理」を立て，「宇宙（自然律）と人（人体リズム）なる心と体の一連的有機的に統体せられた躍動の様態」の上に，「個人の自我の覚醒，個人の自由，平等の欲求，個性尊重，自我実現，自主創造の教育」として「教育舞踊」[25]を樹立しようとする。

教育の中心は全人Der Ganze Menschであり，全体としての人間が教育の対象であり，有機体の内的統一innere Einheit des Organismus を教育舞踊に描き，その「教育的意義及本質」は，Ⅰ.「全一我の実現」，Ⅱ.「全体構成への体育」，Ⅲ.「健全なる美的韻律的表現」であるとする。即ち，R.ボーデが，「フレーベルの自己発展，自己の内部的活動，自己実現，ペスタロッチの有機的調和的自己完成，モンテッソリーの内在的力の自然的助長等の自由教育，人格教育……フィヒテの哲学的認識の上に，クラーゲス等の新しい心理学的思想を根抵として」運動の原理を求めた如く，内外諸説の原理を統合し，芸術と教育に思想的根底をおいて自由濶達な個性的活動として舞踊を考える。舞踊は「より精神的なる生活現象で，人心の内奥に貫流する生命力の溌剌たる躍動である限り，デニスの『神』，ダンカンの『魂』で，ハベマイエルの『道徳的で人を教化するもの』で[25]「舞踊の芸術性と体育性は同一物の両面観」であるとみて，「舞踊と体育と芸術の関係」即ち，芸術と体育・教育の柔軟な関係の樹立の中に「人生を蘇生せしめる芸術教育」を志向する。

升元の舞踊は，「舞踏はどこまでも音楽と運動の融合である」とする音楽観を反映し，「音楽のムッドを舞踏のキイ・ノートとし」，「動的芸術の原動力」をリズムに求めて，「二つの独立した芸術は，同じ水流の中を一つに波立ちつつ下り行くもの」とする。種々な運動様式（後にみるナチュラル・ダンス，エッセティック・ダンス等外来形式）と歌曲（芸術自由教育運動の人々による）によって，創出を進めた作には，詩情の表象と湧出，宗教的神秘的な古典性や自然の美の形象化と共に，国民性民族性の高揚をも企図した，奉讃の作も含まれ，大正期の新思潮の形成と崩壊過程をそのままにうつし出す。

更に，「系統的……」の書名にみられる系統性への志向，即ち舞踊用語の解説[26]舞踊の基本訓練法の解説[27]（バレエ技術から自然運動にわたる）等，科学的組識化のさきがけは改めて見るべきものであろう。

以上の二者にみる動向を，あらためて外来文化の導入・多様化と自立とみて，その実証としての実践内容を観てみよう。

3）実践内容の検討
― 外来文化摂取と自立 ―

この期に先立ち，明治期に外来文化摂取を魁けた坪井玄道，可児徳，白井規矩郎，石橋蔵五郎らの遊戯研究は，この期にも引続き顕著である。英米独佛の体育教育思想と実践を求めた人々は，彼地のダンス方法をその類別のままに受け入れ実践[28]した。曲線行進，円形行進，十字行進など「マーチング」や「舞踏」（コチロン・クワドリールなど）を行進遊戯の内容とする点では先の時代を受けつぎ，「行進遊戯」は先づ円舞，列舞，対向舞，方舞と舞踊形式上に分類[29]され，「動作遊戯」と並び立つ。更に，「動的」「静的」，「一般遊戯」「学校遊戯」と活動性や場と目的によって遊戯を分類する等，質的に検討されながら従来の行進形式以外に，「曲線舞」[30]（curve dance）

(25) 前掲(23)P. 34
(26) 升元「系統的教育舞踊指導書」中巻　北海出版社（昭９）P. 1～P.43
(27) 升元「系統的教育舞踊指導書」下巻　北海出版社（昭９）P. 1～P.66
(28) （明35）日本女子大学運動会にはデルサート式と名しておこなわれている婦女新聞の記事がある（松本輿水，明治期遊戯の　一考察　―　白井規矩郎研究）昭48
(29) 前掲(2)P. 452
(30) 寺岡英吉「学校ダンスの新教材」宝文館（大１）

として「ファウスト」Faust，「ポルカセリーズ」(A Polka) Polka Series など，謂るGymnastic dance が位置づけられる。即ち美的遊戯は次第に外来文化の類型のままに類別され，特性をダンス類別名称上に明確化しようとする。

昭和初期には，これらの質的類別（様式化）はより明確多彩となる。

渋井は，「体育ダンス」の内容を次の10種に類別し，各特性を解説する。即ち，

①「行進遊戯」純然たる行進遊戯……歩行組み合せ，隊形変換の遊戯

②「動作遊戯」表情遊戯（吾が国で創作されたもの）律動遊戯（吾が国で改作されたもの又は創作されたもの）

③「唱歌遊戯」唱歌を歌ひながら踊るものI see youの如く……

④Aesthetic dance 美的表情的体育ダンス。ギルバートは1910年に八種の型，廿七の歩法，四八の動作を組識し，ファースト等ギルバート式ダンスを創作……

⑤Folk dance 体育ダンスの中堅，その根底をなすダンス

⑥Callisthenic dance 狭義の体育ダンス。何等の表情も含れぬ曲線的体操ダンス。

⑦Athletic dance 競技ダンス。オリンピックゲームを型に取ったもの

⑧Rhythmical Gym. 音律体操，柔軟体操の如きはこれに属するもの

⑨Character dance 郷土的，特質舞踏。ロシアのコザックダンス，イギリスのスコッチリール……の如きもの

⑩Natural dance 自然的なれ，優美なれ，表情的なれと自然現象たる風・浪・夜・夕朝や又喜び，悲しみ等の気分を主として表徴したもの（アトキンソン女史，ジョンストン教授のなせるもの）

以上の10種を著者は，①Folk，②Calisthenic，③Athletic，④Rhythmical Gym.に分け，⑤School danceを加え五種にまとめている。

これらの類別はその作品即ち，"Dance of gracious Nike"（Aesthetic dance），"白薔薇章"（Gym. dance 英国キャラクターの改作，）"カルメンシルバー"（Natural dance 昭和6年6月15日創作）と導入紹介・改作・創作と明示され，"Danish Real"（Folk dance）や行進系の演目を加え，作品集一書[31]の中に文化摂取から自立への明らかな歩みをみせる。

これらの導入，改作・創作の歩みは，「教育舞踊」を目指した升元の実践にも通じる。即ち，"牡牛の群Swedish Hazing Dance"（Gym. danceの訳出）"なぎ"井上武士曲，（行進舞踊形式），"Alpen rose"（Natural dance），"パトリックデー"や"グリーク サクリフィシュアル ダンス"[32]（古典的宮廷舞踊の改作），各国のキャラクターを生かして創作した"アラビアン ダンス""ナポリの夕"，など外来様式をとりいれ，他方に審美的詩情，主体的精神美を発現しようとした創作"on the shore海辺にて"，"花"等がみられる。外来様式に基く自作はここにも明らかである。更に，レクリエーション機能としての舞踊にも着目し，「家庭踊り」「盆踊り」として"月見踊り"などを含めている。

この期の歌曲に振付けられた教材を概観して，北原白秋・西條八十等の芸術自由教育運動から生れた歌曲，また，文部省唱歌の普及とも相まって多彩さが目立つ。「あめふり」「故郷の廃家」「荒城の月」「天然の美」などの愛唱歌曲の上に「芸術的価値高い教材」の創出を試み，「自由闊達なる個性的活動の上に，心魂的生命的なる」「美しい肉体的精神的文化形成」[33]を目指してロマンの風潮をもりあげている。

しかし，教材の傾向には，勿論，時代を反映した「軍鑑行進曲」（瀬戸口藤吉）なども採りあげられている。

この期の外来文化摂取と自立への歩みを，海外舞踊教育の歩みと比較する時，これらの運動文化の導入と生成の過程はより明らかな様相としてとらえられる。(表5)即ち，表示上には，Calisthenics ーギリシャ語Kalos(美)とSthenic(力)から命名されたという新しい体操（1853）から次第に美的芸術的要素をつよめ，Aesthetic Calisthenicとなり（M.S.ギルバート，デルサート・システムを導入－1890年代），審美性をうたうAesthetic danceから，より男性への適合をはかりGym.

(31) 渋井「最新 体育ダンス教本」（昭6）
(32) 升元「教育舞踊」上下巻 Greek Sacrificial Dance は「乙女の祈り」として改作。
(33) 前掲(22)

表5　舞踊教育の変遷（アメリカ）

（松本）

年代	
1783	最初の記録，陸軍士官学校（男子）
	最初の女子大（Mount Holyoke）州立大学設立
1807	女子教育者たちのダンスの試み（Emma Willard — Middlebury College）
1817	士官学校，希望者にダンス・クラス（1823，野営必修）
1825	こどもの学校でダンス
1853	Mary Lyon（Mount Holyoke）出版 ┐「音楽にあわせて行う体操」 Dio Lewis "The New Gym."出版 ┤ Calisthenic 修正されたダンス形式としてのGym.　Kalos "美"　Sthenic "力"
1869	Yassar collegeの創立者（一流大の支持） College の中でダンスを支持　この頃各Step
1887	M.B.Gilbert ―― Aesthetic Calisthenics Delsartian Systemの導入（90年代）　芸術形式を導入
	W.G.Anderson，Jig，clogs 導入
1894	D.A. Sargent　ハーバード大へ体育として導入 男女に　次第に表現的に ―― Aesthetic danceに 男性的な　work ―― Gymnastic dance 体育教師によって考えられる
20世紀	（体育の一形式として一般教育に）　Folk，Natural dance 男女両者への教師養成プロとして体育学に定着 ダンスはさまざまな形式をとる
1913	Columbia大に J.デューイ 三者の開発 G. Colby　音楽の情動刺激による動き　自然な動き カリキュラムの統合（1913~16）　創造的な自由 Natural dance B. Larson　動きの体系　Natural rythmic expression ダンス・コース創設（1914） M. H'Doubler　個人の創造芸術経験　Creative dance （1916～18）
1918	Wisconsin 大でM. H'Doubler　Performing Group 1920 年代　concert　dancerの活動 技法の範囲をひろげ芸術形式に，work shop の開催 1930 年代初　高校・大学でのNatural　dance 導入
1930	女子大，女子部（大学）シンポジウム主催（スミス・ヴァッサー） N.S.of Directors of P.E. for Women は全国大会を Dance に献げる
1931	APEA（後のAAPER）Danceに独立のセクション（今日は独立） 全米ダンス教育の推進力になる
1934	Summer school of Dance（Bennington 大） Graham，Holm，Humphrey，Horstら，1934~42に モダン・ダンスの提供
1937	"体育か芸術か"　E.C.Howe 執筆 D公立高校（N.Y.）　modern dance
第二次世界大戦	"アメリカの教育におけるVital force"としてのヴィジョン modern　dance 技法の導入 concert　dance との交流
1940	教育理論，根拠をもとめる M. H'Doubler ―― 人間社会におけるダンス体験の価値
1941	Fredrich Rogers High　school of performing Art in N.Y.city 午前（学科）・午後（実技）―― 音楽・ドラマ・ダンス
1948	〔Perfoming　art の時代〕（Conneticut 大）
1950	論争 ―― "進歩的教育"への批判
～	科学の高レベル ―― 健康テスト・コンディショニングの体育 "ダンスの本質は芸術"の認識

年代	
1950	科学化・機械化時代 ―― 個人の関与・有意味な人間関係の要
～	〈個人化した創造的体験としてのダンス〉 open ―― ended な教育体験
1960	体育の学問的科目化 動きの教育推進 performing　art の独立の方向 ・体育学部 ・独立のダンス学部 ・劇場や音楽学部内のプログラム 多様化する価値 ユニークなメディアの提供
～	
1970	小学校におけるダンス教育の方向 1）動きの基礎とヴァリエーション 2）創造的なリズムとダンス 3）フォーク・ダンス 中等教育のダンス・プログラムを豊かにする準備 ・特別コース（バレエ・タップ・モダン・ジャズ等）の設定 ・専門家の導入・大学学部と協力（ダンス専攻生が教える） ウィスコンシン・ワシントンパーク高校 ―― 男子のモダン・ダンスクラブ 中学校にダンス専門家をいれる傾向 ―― イリノイ大舞踊学部　より巾広い体験を目指す ユタ大学　18の高校にフルタイムのダンス教師 体育の代わりにもできるダンス・クラス 男生徒の関心，男生徒・共学クラス N.Y.市立高校（1947年創立）の方向 ―― プロ←→学問の二方向を満たす ―― 70%大学へ
1978	AAPERD　218大学　ダンス学位を授与するプログラムの一部 ・ダンス教育 ―― ダンス教育学 ・performing　art ―― ダンス専攻 ・ダンス集中 ―― 関連分野の必要
1979	大学のダンス調査（95大学中33はカナダ） ・60~70年代初めに設立が多い ・48は1～3名のTeacher，27は5名以上のTeacher ・46は学位を与える ・23は大学院 プログラムの多様化 モダン・バレエ・コレオグラフィー・Rec形式・教育法・サマーワークショップ（58）・カンパニー（56） 行動科学・民族学・史学・記譜法・セラピー・エフォートシェイプ 関連芸術 ○次第に体育学部のダンス・プログラムは分離傾向 インディアナ大　体育学部 ―― ダンス教育（モダン，レク・ダンス形式，教授法） 音楽学部 ―― バレエ学科（オペラ上演参加） ○各学部の独自傾向 コロンビア大 ―― ラバン記譜法（エフォート・シェイプ） テキサス・クリスチアン大 ―― バレエ ― 専攻重点 私立　performing　art を第一次 公立　学部・学科（体育に）　多様化 二専攻を許すダンス ―― 協同の大学 Dance　&　Dance　Education

〈引用文献〉
"To want to Dance：A　biography of M. H' Doubluer"　1978.
"History of the Dance in Art and Education" 1981.

danceが生まれる。(前出D. A. サージェントのハーバード大学への導入)。一般的にはFolk dance, National danceが普及し，やがて，より自然な動き，創造的な自由を求めて，Natural danceが生まれ，Creative danceが体育学部内に位置づけられ，コンサートダンサーと大学の交流をみせながらPerforming group を大学内に成長させる1850年頃から1920年頃のアメリカ舞踊教育[34]の発展に近似するのを認め得るだろう。

体育か芸術かの論議の中に，1940年頃には，"アメリカの教育におけるVital Force"としてのヴィジョンを確立し，人間社会におけるダンス体験の価値の容認をみる彼地。日本において，自主創造のダンスがその市民権を得たのは昭和22年(1947)学習指導要綱からであり，第二次大戦後のアメリカの舞踊教育の多様な発展[35]は増々彼我の制度上の異りを大にするのを見る。

ともあれ，舞踊の本質と人間性に目覚めて敢然として彼我に理想を探求したこの期は，前にも述べたように，すべての外国語名を排除した昭和17年体錬科教授要目の錬成主義の下に，目的・内容(教材)ともに変貌せざるを得ない時を迎えるのである。

おわりに

まとめと補綴の意をもってこの期を概括しよう。先づ，書名上に表徴された主張の差違にかかわらず，広く体育，芸術，教育思想を内外に求め，舞踊の進化の過程の上に本質を探り，論的にダンスの特質を抽出しようとした点で，筆者は共通基盤に立つとみられよう。また，芸術至上を排し，身体教育と人格教化のダンスに帰結し，時代の体育目標に同化しようとする点でも共通性を有し，時代そのものを立証していると思われる。

その結果，要目の狭隘を指摘しつつ，要目の精神を体する形で，"副教材"を輩出する実践へ向ったとみるべきかも知れない。

しかし，心身観をひろげ，優美優雅志向の美意識を反映して，自由と韻律の自然運動にロマンティシズムを旺溢させた"教材"は，謂るマーチング中心の前時代を越えている。更に，体育運動と芸術の技法を導入し，外来運動文化諸形式の質的分化を行い，身体運動の価値を運動以上のものとみて，内的精神の所産としての外的表現形式を多様化して理念的実践的に「舞踊」の黎明を予感させた時として，この期は再認されるべきであろう。

この期の限界は，上述の体育，芸術，教育に対する文献研究および芸術文化への接近が困難な時代として，当然，平面的な知見に止まり，これらを組織して芸術と教育に新たな観念をもたらす熟成には至らなかったとみるべきであろう。この期にはまだ人間の心理的発達段階とダンスに関する論及も少い。ここに，自由創造の理念と芸術文化を求めつつ，自作の提示によって外来文化摂取から自立への道を拓きつつ，結果としては，「教授－受容」の教育観内で"教材"を多彩にするに止まったこの期の実態があるとみるべきかもしれない。

この期の様相は，「舞踊」— 消え去る現象性文化における研究教育的接近の困難を改めて認知させるものであり，この期の責としてではなく，現象性文化を教育科学として追究し，その価値をみようとする舞踊教育の本質につながる問題として認知すべきものであろう。

更に，この期には，男性の論的知見に対する女性の感性的実践，やがて教育研究分野から男性が去り，女性のダンスへの移行を予想させる，これらの背景と問題点。また，要目の遵守，特に体育目標と舞踊の本質との関係の論究など，国家社会の趨勢の中で舞踊と舞踊教育が余儀なく変貌する過程がつぶさによみとれる。

狭義の舞踊教育が舞踊文化を擁して，より広義に見なおされようとする今日，この期が内蔵し提示する課題は，今日にもなお持続することに気付く。アメリカ舞踊教育との対比は，より明らかに今後の深い知見と洞察を我々に迫るものであろう。特に，理念としての芸術志向と教科としての体育目標・内容及び方法への同化過程での葛藤，また，理念としての芸術志向が実践上には芸術技法の導入にとどまる矛盾した実態など，今日の舞踊教育へ語りかける歴史的警鐘として，この期の意義と問題はあらためて再認されるべきであろう。

紙数の限界から詳述できなかった多々を今後の課題とし，ひとまずこの稿を終りたい。

付記　本稿は昭和57年度お茶の水女子大学人文科学研究科「舞踊教育学特論」の一貫としてまとめたものである。表1には中野祐子さんの協力を得た。なお，本稿は，共同研究「大正・昭和前期の舞踊教育 — 戸倉ハルとその時代 —」を教授要目の流れの渦心とみ，その外延の潮流に視点をおいて考察を進めた。(松本)

(34) 松本「M. ドウブラー」体育科教育 1979 Vol. 27, No. 9, 12

(35) 松本「舞踊教育学科のめざすもの」体育の科学 1982およびVol. 32 No. 11

所蔵：国　会 ― 国会図書館
お茶大 ― お茶の水女子大学
日体大 ― 日本体育大学
中京大 ― 中京大学
筑　波 ― 筑波大学
日比谷 ― 日比谷図書館
秩　父 ― 秩父宮記念スポーツ図書館

大正・昭和前期の舞踊教育関係書一覧（全167冊）

No.	発行年月		書　　名	著　者　名	発行所名	所　蔵
	大正					
1	1	8	スクールダンス	寺崎　英吉，石橋蔵五郎	金　港　堂	国　会
2	1	12	新定体操及遊戯	津崎亥九生，堀内　武夫	学海指針社	日　体　大
3	2	5	訂正増補　行進遊戯	川瀬元九郎，手島儀太郎	内田老鶴圃	中　京　大
4	2	6	新定小学体操遊戯の実際	伊藤　啓八，他	修　文　館	国　会
5	2	6	小学校遊戯の理論及実際	可児　徳，矢島　鐘二	宝　文　館	国　会
6	2	11	尋常小学唱歌動作遊戯　前編	真島　睦美	大倉書店	国　会
7	3	3	文部省要目に準拠したる遊戯の詳説及取扱法	富山師範附属小学校	広　文　堂	国　会
8	3	4	小学校遊戯教授の実際	滋賀県女子師範附属小学校	金　港　堂	国　会
9	3	11	心理的分類法に従へる運動遊戯法体系	川瀬元九郎，手島儀太郎	内田老鶴圃	国　会
10	4	4	個人団体共同本邦固有遊戯全書	小沢卯之助	国民教育社	国　会
11	4	5	小学校，女学校，師範学校行進遊戯法精義	真行寺，国分，吉山	二　松　社	国　会
12	4	5	学校体操遊戯要解	上田信太郎	宝　文　館	国　会
13	4	6	六学年配当小学校遊戯の実際	西岡，林	世渡谷文寿堂	国　会
14	4	12	最近模範遊戯法	三浦　豊	遊戯法研究会	国　会
15	5	3	最新式師範学校女学校小学校系統的行進遊戯	西岡　景治，他	井関文栄堂	国　会
16	5	8	教科適用　小学校新遊戯書	石橋蔵五郎，柿沼　脩治	朝野書店	国　会
17	5	10	正課放課時間及運動会に於ける遊戯の実際	土屋　耕一	目黒書店	国　会
18	6	5	小学校に於ける戸外室内遊戯法	瀧　正善，青木　千代	清　華　堂	国　会
19	6	8	尋常小学校各学年遊戯の実際	小学教育研究会	小学教育研究会	国　会
20	6	10	律動遊戯　第1巻	土川　五郎	律動遊戯研究所	国　会
21	7	8	自動主義遊戯教授の革新	自動教育研究会	明　誠　館	国　会
22	7	9	最新遊戯集成	尼子，吉原，真行寺	隆　文　館	国　会
23	8	3	理論実際競技と遊戯	可児，石橋，寺岡	中文館書店	国会，筑波
24	8	11	最新行進遊戯集	国民体育会	警　眼　社	国　会
25	8	11	小学校に於ける遊戯教授の真髄	石橋蔵五郎，寺岡　英吉	中　文　社	国　会
26	9	5	学校体操科の教材実験遊戯教授書	真行寺吉太郎	明　誠　館	国　会
27	9	6	小供の唱歌と遊戯	真島　睦美，水谷　武夫	大倉書店	国　会
28	9	7	大正幼年唱歌表情遊戯　上巻	土川　五郎	目黒書店	国　会
29	10	4	遊戯競技の実際	可児　徳，佐々木　等	宝　文　館	お　茶　大
30	10	10	体操競技遊戯集成	尼子，石丸，他	隆　文　館	国　会
31	11	5	日本遊戯の解説	可児，石橋，寺岡	広　文　堂	日　比　谷
32	11	5	理論実際女子体操遊戯	可児　徳，高野　常政	中　文　館	国　会 お　茶　大
33	11	6	改訂増補尋常小学校唱歌動作遊戯	真島　睦美	大倉書店	国　会
34	11	7	最新遊戯	吉岡　清	三　州　堂	国　会
35	11	10	体育を主とする学校ダンスの新教材	寺岡　英吉	宝　文　館	国　会 お　茶　大
36	11	12	童話童謡及音楽舞踊	松村，田辺	児童保護研究会	お茶大(私)
37	12	2	体育ダンスと社交ダンス	荒木　直範	日本評論社	日　体　大
38	12	3	自由活動に即したる団体遊戯の実際	鶴居　滋一，川口　英明	目黒書店	国　会 お　茶　大
39	12	3	ダンス	佐々木　等，武田　義昌	目黒書店	国　会
40	12	6	韻律体操と表情遊戯	白井規矩郎	敬　文　館	国　会 お　茶　大
41	12	8	可愛いダンス	寺岡　英吉	広　文　館	国　会 お　茶　大
42	12	12	体育ダンス精義	荒木　直範	都村有為堂	国　会
43	13	4	体育ダンス	砂本　靖二	広　文　堂	国　会 お　茶　大
44	13	4	律動的表情遊戯	土川　五郎	律動遊戯研究所	お茶大(私)

No.	発行年月		書名	著者名	発行所名	所蔵
45	13	5	動情遊戯と競技	武田　侃爾	広文堂	お茶大
46	13	6	童謡と舞踊	久保富次郎	内外出版	国会
47	13	7	童謡小曲　学校舞踊　上	真島　睦美	大倉書店	お茶大
48	13	9	小学校の遊戯競技	佐々木，中島，他	目黒書店	国会
49	13	9	律動遊戯　をさなごのうた	茂木，萩原，土川	教文書院	国会
50	13	9	童謡新遊戯	久保富次郎	教文書院	国会 お茶大
51	13	9	スクールダンス	印牧　季雄	桜木書店	国会
52	13	12	学校遊戯	藤山　快隆	目黒書店	秩父
53	14	5	童謡小曲　学校舞踊　下	真島　睦美	大倉書店	お茶大
54	14	6	表情新遊戯	久保富次郎	教文書院	国会 お茶大
55	14	7	理論実際遊戯の系統的研究	大河内　泰	都村有為堂	国会
56	14	8	教育的体育ダンスと其指導法	寺崎謙太郎	章華社	国会 お茶大(私)
57	14	8	教育ダンス	内田　トハ，御笹　政重	東洋図書	国会 お茶大
58	14	9	学校舞踏三十四講	小瀬峰　洋	厚生閣	国会
59	14	9	理論実際　大正幼年遊戯	石橋，宮原	中文館	国会
60	14	10	教育的体育ダンス	寺岡　英吉	坂本書店	国会 お茶大
61	14	10	童謡遊戯と体育ダンス	赤間　雅彦	さゝや書店	お茶大
62	14	11	体育ダンスの理論と実際	渋井　二夫	教育社	国会
63	15	3	体育ダンス教材集　第1編	荒木　直範	都村有為堂	国会
64	15	4	体育ダンス教本	ヂムナスチックダンス研究会	右文館	日体大
65	15	5	小学新遊戯指導の実際	須貝　一司，星　愛記	教文書院	国会
66	15	5	小学校に於ける趣味の遊戯	酒井　将	三友社	国会
67	15	7	体育的学校ダンス	朝留記太留	(非売)	筑波
68	15	7	遊戯の教育的指導	西園富吉	都村有為堂	国会
69	15	9	遊戯及競技法精義	真行寺，杉本，西野	文教書院	お茶大 筑波
70	15	9	新要目に準拠せる遊戯及競技の実際	真行寺朗生	啓文社	国会 お茶大
71	15	9	年齢に適せる遊戯教育	下間　芝克	目黒書店	国会 お茶大
72	15	10	欧州の体育をみて	三浦　ヒロ	芦田書店	国会
73	15		小学校体操遊戯指導書	寺谷　朝蔵	東洋図書	お茶大
	昭和					
74	1		最近国民体育舞踊教本	渋井　二夫	新生閣	国会
75	2	1	改正要目に拠れる行進遊戯	寺岡　英吉	都村有為堂	国会 お茶大(私)
76	2	4	舞踊の本質と其創作法	石井　漠	人文会出版社	国会 お茶大
77	2	4	運動会の計画と其遊戯	真行寺朗生	啓文社	国会
78	2	5	改正要目準拠図解指導動作遊戯と競争遊戯	小瀬峰　洋	教文書院	中京大
79	2	6	体育ダンス教材集　第2集	荒木　直範	都村有為堂	国会
80	2	6	理論実際　唱歌遊戯と行進遊戯	赤間　雅彦	日本体育学会	お茶大
81	2	6	唱歌遊戯	戸倉　ハル	目黒書店	(私)
82	2	7	改正要目準拠唱歌遊戯及行進遊戯の理論と実際	加藤　英吉，福田　とし	浅見文林堂	中京大
83	2		教科書を中心としたる児童新舞踊と遊戯	町田桜園編	盛林堂	お茶大
84	3	3	遊戯の詳解及取扱法	富山師範附属小学校	広文堂	国会

No.	発行年月		書名	著者名	発行所名	所蔵
85	3	4	教室内の体操と遊戯	赤間　雅彦，石橋蔵五郎	中文館	国会
86	3	6	母と教師のための遊戯教育の実際	杉田徳太郎	光文社	国会
87	3	8	体育ダンスと表情遊戯　夢のお国	渋井　二夫	九段書房	お茶大
88	3	10	運動会教材を主としたる体育ダンス	大日本体育ダンス研究会編	児童学習社	国会
89	3	10	コドモノ遊ビ	三浦　ヒロ	日本体育学会	国会
90	4	3	児童の本性に立脚したる遊戯教育の実際	多賀　四郎	南光社	国会
91	4	6	唱歌あそびと小さい唱歌遊戯	長尾　豊	厚生閣	国会
92	4	8	体育ダンスの理論と実際	渋井　二夫	小学館	お茶大(私)
93	4	11	行進遊戯	高橋キャウ	右文館	お茶大(私)
94	5	2	歩法教授	御園生　貢	体育連盟出版会	国会
95	5	5	行進遊戯	三浦　ヒロ	一成社	お茶大
96	5	5	低学年における遊戯化教育	武政　太郎監修	大原出版	お茶大
97	5	6	低学年教育遊戯の学習化	守屋　貫秀	郁文書院	国会
98	5	7	最新体育ダンス原論	渋井　二夫	人文書房	国会 お茶大(私)
99	5	8	最新学校唱歌遊戯　第1，2集	印牧　季雄，室崎　琴月	日本唱歌出版	国会
100	5	9	最新学校唱歌遊戯　第3，4集	印牧　季雄，室崎　琴月	日本唱歌出版	国会
101	5	9	遊戯精選	斎藤由理男	玉川大学出版部	日体大 筑波
102	5		小学校遊戯競技　全教材とその指導	斎藤　薫雄	厚生閣	お茶大
103	6	1	体育ダンス	伊沢　エイ	目黒書店	国会 お茶大
104	6	6	子供と遊戯	土川　五郎	子供研究講座	国会
105	6	7	体育ダンス教本	渋井　二夫	人文書房	お茶大(私)
106	6	8	学校遊戯振付の理論と実際	印牧　季雄，井上　徳雄	大正書院	国会
107	6	8	最近学校唱歌遊戯　第7集	戸倉　ハル，井上　武士	大阪日本唱歌出版会	国会
108	6	9	高学年の表現舞踊	高橋　堯	文化書房	国会
109	6	11	学芸会を主としたる各学年の童謡舞踊	渋井　二夫	人文書房	お茶大(私)
110	6	12	小学校に於ける行進遊戯の材料と其指導法	三浦　ヒロ	目黒書店	国会
111	6	12	曲譜及び図解付体育ダンス提要	下間　芳克，下間ミツエ	六文館	国会
112	6	12	最新体育ダンス教本	渋井　二夫	人文書房	国会
113	7	3	学校舞踊創作の心境と実際	渋井　二夫	日本体育学会	国会 お茶大
114	7	4	学校遊戯	川口　英明	目黒書店	国会 お茶大
115	7	4	童謡と児童舞踊の研究	野村　政夫	文化書房	お茶大
116	7	6	幼稚園，尋一，尋二の舞踊（全3冊）	石井　小浪	厚生閣	中京大
117	7	8	教育舞踊（上）（下）	升元　一人	日本教育学会	お茶大
118	7	11	新しい学校遊戯（中編）	川口　英明	目黒書店	お茶大 筑波
119	7	11	最近思潮体育とリズムの根本研究	渋井　二夫	人文書房	国会
120	7	12	レコードによる児童の舞踊	石井　小浪	日本コロムビア	国会 お茶大(私)
121	7	12	石井式舞踊体操	石井　漠	玉川学園出版部	国会
122	7		低学年の童心遊戯	高橋　堯	文化書房	お茶大
123	7		児童遊戯集	香川　一郎	児童遊戯研究会	お茶大
124	8	4	体育ダンス新教本　附創作法	渋井　二夫	小学館	お茶大(私)
125	8	4	体育ダンス基礎練習教本	渋井　二夫	日本体育学会	国会
126	8	4	学校舞踊　理論より創作へ	印牧　季雄	桜木書房	国会 お茶大
127	8	5	文部省唱歌の劇と遊戯　尋3の巻	佐藤　秀美	桑文社	国会
128	8	6	体育ダンスの指導	渋井，寺谷	目黒書店	お茶大(私)

No.	発行年月		書名	著者名	発行所名	所蔵
129	8	12	基本体育舞踊の理論と実際	赤間　雅彦	厚生閣	国会
130	9	5	レコード吹込楽譜付　学校舞踊	石井　小浪	小学館	お茶大
131	9	7	系統的教育舞踊（上）（中）（下）	升元　一人	北海出版会	お茶大
132	9	9	小学校の遊戯	中島　海	目黒書店	国会 お茶大
133	10	3	体育ダンスと唱歌遊戯	伊沢　エイ	目黒書店	国会
134	10	7	図解詳説新小学校新舞踊	日本教育舞踊協会	東宛書房	日体大
135	10	7	最新体育ダンス教本　第7集	渋井　二夫	新生閣	国会
136	10	8	学校舞踊・体育ダンス教材と指導解説	柿沢　充	岩本書店	国会
137	10	9	文部省新訂小学唱歌尋1～6の舞踊(全6冊)	印牧　季雄，他	大正書院	国会
138	10		低学年中心　唱歌・遊戯・児童劇	水木　梢	高踏社	お茶大
139	10		創作学校新舞踊	日本教育学会	日本教育学会	日比谷
140	11	1	体育舞踊（師範大学講座，体育第9巻）	伊沢　エイ	建文館	筑波
141	11	1	女子体育より見たる行進遊戯 （師範大学講座，体育第13巻）	三浦　ヒロ	建文館	筑波
142	11	3	幼稚園に於ける唱歌遊戯 （師範大学講座，体育第11巻）	戸倉　ハル	建文館	筑波
143	11	3	新律動遊戯	山本　寿，中尾　勇	目黒書店	国会 お茶大
144	11	6	新理論に立脚せる尋一教育舞踊指導全書	升元　一人	南光社	国会 お茶大
145	11	7	小学校・女学校・女子師範学校・唱歌行進遊戯解説	学校体育研究会編	成美堂	国会
146	11	7	新要目準拠学校ダンスの新指導（全3冊）	渋井　二夫	明治図書	国会
147	11	8	新要目に基く遊戯及競技	久本　弥吉	三友社	国会
148	11	8	新要目に基く唱歌遊戯及行進遊戯の新指導	渋井　二夫	三友社	国会
149	11	8	子供の舞踊	石井　漠	フレーベル館	国会 お茶大
150	11	9	教材詳解課程精説　改正学校遊戯及競技	宮田　覚造	東洋図書	国会 お茶大
151	11	11	女性体育とダンス	三浦　ヒロ	東洋図書	国会 お茶大
152	11	11	新要目準拠遊戯及競技精説	宇野　銀松，宮寺　喜一	啓文社	国会
153	11	12	小学校唱歌・行進遊戯 （現代学校体育全集，小学校編第7巻）	伊沢　エイ	成美堂	国会
154	12	1	石井小浪学校舞踊選集	石井　小浪	三友社	国会
155	12	1	改正要目遊戯及競技の指導　尋常科	丸　幸太郎	南光堂	国会
156	12	3	女学校の唱歌遊戯行進遊戯 (現代学校体育全集，女子中等学校編第5巻)	三浦　ヒロ	成美堂	国会
157	12	3	遊戯の価値とその指導	倉橋　惣三	文部省社会教育局	国会
158	12	8	文部省要目準拠唱歌遊戯行進遊戯教本第2集	法喜　聖二，前田　伸一	日本律動遊戯研究所	国会
159	12	11	新要目研究　小学校の遊戯競技	佐々木　等	目黒書店	秩父
160	12		文部省改正要目　小学校唱歌遊戯・行進遊戯解説	池田　一郎編	日進舎	国会
161	13	5	舞踊の基本と創作	石井　漠	シンフォニー楽譜出版社	日比谷
162	13	6	学校遊戯及競技	野口源三郎	目黒書店	国会
163	13	7	最近体育ダンス教本　第10集	渋井　二夫	新生閣	国会
164	14	9	学校舞踊の基本訓練	升元　一人	啓文社	国会
165	15	10	体育律動譜指導書	須崎　稔	国民体育普及会	国会
166	17	5	体育舞踊歩法用語図解	丸岡　嶺	大正書院	国会・お茶大
167	17	7	最新国民体育舞踊教本　第14集	渋井　二夫	新生閣	国会